

自らに勝って初優勝

毎日コツコツ一級建築士

《第23回ハンディキャップ競技九州大会》

～1日目男子の部

ネット62（ハンディ19、グロス81）

椎葉 光一（大博多、77歳）



ゴルフは自分との闘いと、よく言われるが、77歳の椎葉の初優勝がまさにそうだった。アウトの前半を2バーディー、2ボギーのパープレー36。ハンディー19を考えると、圧倒的に優位なスコアだった。しかし、インに入ると、10番からダボ、ダボ、ボギー、トリプル、ボギーと5ホールで9オーバー。「30分休憩があつてリズムが狂った。集中力も欠けたし、なんかフワーツとしていた」。ここで立ち止まる。「1球1球

自分のやれることをやろう」と気持ちを切り替えると、15番からの4ホールをパーでしのいで、終わってみれば2位に4打差で優勝である。

「気持ちの大切さをまざまざと感じた。優勝はまぐれです。みんなに『いける、いける』と乗せられた。ハンディ19はみんなから羨ましがられて」

福岡市生まれで職業は一級建築士。ルーツな苗字で分かるように宮崎県椎葉村にある。ゴルフは32歳で始め、4～5年ほどやめていたが、再びクラブを手にする。練習は「ボケないために体を動かそう」とほぼ毎日のように練習場に通って40～50球打つ。ドライバーの平均飛距離は210ヤード。「真剣にやるのはパターだけど、素人はドライバーが当たらないと後が続かないし、面白くない」とドライバーショットの練習にも力を注ぐ。長年続けて来たゴルフの魅力を「難しいのが楽しい。そこを何とかしたくなるから。それに友達が増える」と話す。

全国大会出場に向け「楽しんできますよ」と77歳はにこやかに笑った。

初出場初優勝

シングルプレーヤーを目指す音楽療養士

《第23回ハンディキャップ競技九州大会》

～1日目女子の部

ネット66（ハンディ12、グロス78）

内田 幸子（トライアルOITA、65歳）



初出場初優勝の内田にはペアリングというツキがあったのかもしれない。グロス78で12のハンディを生かしてネット66。「出来過ぎです。ショットは曲がらないし、パターが入った。それに同じ組にハンディ2のうまい方がいて、その人のスイングが参考になった。リズムがいつも一定で、ずっと見ていました。すごいな、と」。その方とは林加奈子（佐賀クラシック、50歳）。彼女はグロス80、ネット78で20位タイだったが、内田に幸運を運んできたのである。

アウトからスタートし、ボギーが3つ先行するが、9番で7mを沈めてバーディー。前半を38で折り返し、後半のインはバーディーはなかったものの、4ボギーの40。大きく乱れなかったのが優勝に繋がった。

大分市生まれで、ゴルフは28歳から始めた。ピアノ講師をしながら40歳まで夢中になるが、職場が変わると時を同じくしてゴルフから離れる。「クラブを握らないし、ゴルフを全く見なかった」。この間、内田は音楽療養士の資格を取って病院勤めをした。音楽療養士とは、音楽の力を活用して心身に障害を持つ人々の機能回復や生活の質の向上を支援する専門家。現在は非常勤で仕事にあたる。

クラブは58歳から再び握るようになる。現在は「目指せ！シングル」を合言葉に週3回、練習場に通う。1回100球を打つが、ほとんどアプローチに費やす。全国大会は2021年の九州女子シニアで12位タイに入って出場以来。「落ち着いてできたらいいな。勉強させていただきたい」と謙虚な姿勢で臨む。